
黒魔女物語（仮）

里依紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒魔女物語（仮）

【Nコード】

N4790M

【作者名】

里依紗

【あらすじ】

とある学園の七不思議。

七つ目の不思議にはどんな真相が・・・？

・・・なんてシリアスでは有りません。

ツツコミな姉とボケボケ（+腹黒）な妹の双子の姉妹が送る、黒魔女物語。

題名は仮です。

第一話　く学園の魔女く（上）（前書き）

改稿して加筆修正しました。

第一話 学園の魔女（上）

「全員起立！」

ガタガタガタ……ガタン！

「あう……」

初等部の少女が椅子を倒したため、元に戻した。

「これより、空鳥^{くうちゅう}7年度、ホワイト学園一学期始業式を始めます。礼！」

その場に居た全員が頭を下げた。

「着席！！」

ガタガタガタ。

「ホワイト学園創始者」

この職業名に（うげつつ）と思わなかった在校生は居ないだろう。居たとしても変人だ。

何たって、話が長くて有名なのだから……。

その後、創始者殿のお話は延々と時間続き、生徒会、教師からの注意なども含め、計三時間間の始業式が幕を閉じた。

「ふへえええ……」

初等部6年C組（先生込み）は、教室につくと同時にため息をついた。

……かと思うと、

「何だよあん人はあ」

「話、長過ぎるよね」

「ムダに疲れるし」

「もはや七不思議の一つだよな」

と、次々に愚痴を言い出した。

「こちら、あの方はホワイト学園創始者様だぞー、一応敬つておけ」

この、威厳のかけらも無い人物はこのクラスの担任である白炎雷牙（先生）である。

「おい、一応は無いでしょーが、一応は」

「ああ、あの人創始者だったんだあ……」

「?!三十一回は創始者つて聞いてるでしょ?」

「あれえ、そうだったけ?」

私聞いてた?」

「あゝも、入学式で一回、今までの始業式やら終業式やらで30回……あ、去年は先輩の初等部卒業式にも居たから32回か」

と、どーでも良い話をしているこの二人は双子の黒羽こくば 里良りら（姉）と、里咲りさ（妹）である。

「まあ、そんなどうでもい人の話よりも、席に着け！。

十秒以内につけよー、着かなかった奴はグランド10周だ！」

そんな、白炎の声が響き渡ると、一瞬のうちに全員席に着く。

「ハーイ、出席とるぞー・・・あーめんどくさ」

ボソツと最後に余計な言葉をつけた白炎に、生徒の一人が立ち上がって指摘した。

「先生！そんな事を面倒臭がっては教師として駄目だと思いますっ！」

「・・・さ、気を取り直して出席とるぞ！。」

白炎は生徒の言葉をはぐらかすように言う。

「梅切うめきり！」

「はい！」

「王后おうごう！」

「はい？」

「海道かいどう！」

「ヘイ！！！」

「過選無かせんむ！」

「はい」

・

・ ・ ・ ・

「里良、里咲、知ってる？」

6年C組28番幽蘭^{ゆうらん} 千尋^{ちひろ}が黒羽姉妹に話しかけた。

「何を？」

二人は声を揃えていった。

千尋は

「この学園の七不思議。本当に起こるらしいから今夜、行ってみない？」

と、話を持ちかけた。

「今夜？あたしは良いけど里咲は？」

「うーん、良いよー。」

「……怖くない？」

そう言う里咲に里良が突っ込んだ。

「怖くなかったら七不思議じゃないでしょーが。
ねえ、千尋」

「同感」

二人にいわれ、里咲は、

「そ、そんなの分かってたの！
べ、別に暗いの怖い訳じゃないの！！」

と、あわてて言い訳をした。

しかし、里良は悪戯っぽく笑うと、

「暗いのが怖い訳じゃないって七不思議は怖いの？」

と、責めた。

「……………どっちにしても、怖い……………よ……………。」

ついに白状した里咲に里良は、

「あ……………そーいやあたし達、お化け屋敷に入った事無かったね。
寝る時も豆電球つけてるし」

そうブツブツ言って一人で勝手に納得していた。
それを聞いた千尋は言った。

「じゃ、里咲はパス？」

「？……………行くの。里良が行くんなら……………」

「ん。じゃ、今夜8時、里良たちの部屋行くね」

と、里良が言い、千尋はそれに賛成して3人は黒羽姉妹の部屋へ向かった。

「……おもしろそうだねえ」

「……今夜、こっそりついて行ってみようかねえ」

真つ黒な二つの陰が、そんな会話をしているとも知らないで……。

「で、七つ目は食堂のおばさんが気付いたんだけど、使っていない筈の湯のみの一つだけが妙に綺麗になつていたんだって。半月前に急に綺麗になつてからずっと綺麗なままだとか」

千尋はそう言つて話を終わつた。

「へえ、おもしろそうだね。」

早く夜にならないかなあ。

ねえ、里咲」

里良いは里咲くの方へ振り向いて言った。

「う……うん、同感なの。」

里良の問いに、里咲は目線を外さざるを得なかった。

里良はすぐその事に気がつくと言った。

「あ、ゴメン。」

えー……と、探検するのに必要なのは………」

千尋は里良が言おうとしていた（と思われる）物を手に取って行った。

「懐中電灯」

引き出しの中を探していた里良は言った。

「あつ、いつの間に！」

「ここ来てすぐ」

「へー」

そんな会話を隣の部屋から同じチョーカーをした二人が聞いていた。

『ますますおもしろそうだねえ』

『早く夜の8時になってほしいねえ』

『おゝ、やつぱ不気味だよ〜夜の学園は。二人とも、7つのどれから行く?』

ホワイト学園特別教室棟にて。小声で里良は他の二人に尋ねる。

千尋はハテナの顔をすると言った。

『7つ? 4つだよ。三つは理由分かってるもん』

千尋の言葉に今度は黒羽姉妹が?の顔になった。

『三つは分かってるなら回らなくて良いよね……?』

里咲は不安そうに聞く。

『うん、めんどいし』

『で? 分かってるのは?』

里良が聞くと、千尋は待つてましたという様に話し始めた。
纏めると、

- ・ “創始者の話が長い”のは言いたいことを全て言うからである。
- ・ “教室の机の上に置いた教科書が開いていた”のは、白炎先生の窓の閉め忘れの所為である。
- ・ “プールで水音がする”のは忍び込んで遊んでいく人がいるからである。

……だ、そうだ。

『おわかり？』

千尋がそういつて聞くと、二人は声を揃えていった。

『『おわかり』』

『よし、じゃー行こう。　まずは理科室』

千尋が言つと、里良が、

『んじゃ、さつさと見て戻る。　先生に見つかったら怖いし』

と、言つたので、3人は小走りで理科室へと向かった。
ガラガララッ

千尋が理科室の戸を開ける。

月が雲に隠れているだけあつて理科室の中は真っ暗だ。

里咲は少し身じろぎをする。

『あうゝ、やっぱり怖いのだ。
ひゃあ！！』

理科室に入った瞬間、里咲は何かを見て、里良の腕へと悲鳴を上

げながら飛びついた。

『どつたの?』

『い、いま……、人体模型が……キャアアアー!』

里咲が里良へと状況を説明しようとする、又も里咲は叫んだ。

『だーから、どつたのって聞いてるでしょーが。説明してよ』

里良が再び聞くと千尋が人体模型を指していった。

『多分……というか全体あれ(・・)のせーだよっ』

カラッ………カラッ………カラッ………

(どういうわけか)台車に乗った人体模型が微妙に、ほんつとうによく見ないと分からない位動いた。

『うあっ……誰か後ろに隠れてるとかじゃないよね?』

そう言つて里良がそーと近づいて人体模型の乗った台車の裏を覗き込んだ。

そのとたん、

「うゝあゝあゝあゝっ!」

と大声を出した。

千尋が近づきながら、

『どーしたの? ……というかそんな大声出したら先生にバレるかもよ?』

というと、里咲が真っ青になっていった。

「黒い物体Gよー！黒い物体G！！」

その意味不明な“黒い物体G”という単語について千尋がハテナマークを浮かべると、里良が、

『イコールゴキブリ』

と、すっきりした解説をした。千尋は一瞬納得したが、すぐにハテナマークの表情に戻った。

『なんで里良がゴキブリにビビってんの？ 虫“には”強かったじやん』

『いくら何でもこーんなに居てビビらなかつたら超のつく変人だつての！（あと、“には”は余計だ！）』

里良がそう言いながら台車の裏を示す。

そこには何十匹というゴキブリがうようよしていた。

『うげえ』

『早く次へ行こうよう…………』

『そだね』

そして3人は理科室、今や「ゴキブリ室」を後にした。

3人の出て行った後、理科室の教卓の下から出てきた、髪の毛で左目が隠れた少年と、同じく右目の隠れた少女が話をしていた。

『4つめといたねえ』

『残りは3つだねえ』

『黒い物体Gって面白かったねえ』
『キャハハハハハハ……』

第一話　く学園の魔女く（下）

『ハイ、気を取り直して次はここ、第2音楽室』

千尋が戸の前に立っている。

『ここは何が起こるの？ “起こる前に”説明して』

里良が言つと、千尋は話し始めた。

『ここでは……』

ポロロロラララララリリリリン！

……間に合わなかったが。

『コラー、“起こる前に説明しろ”と言っただろーがあああ！……とにかく入ってみよう』

里良は最初起こったものの、すぐ元に戻ると、戸に手をかける。すると里咲が、

『はう、怖いよお……』

といって尻込みしたが、二人はかまわず戸を開ける。その途端、

ピリリリリララララロロロロンッ

今度はピアノが高い音から低い音へと鳴った。

「キヤー、何か居るのーー！」

里咲が叫ぶと、千尋が手に持っていた懐中電灯をピアノへ向けた。
真っ暗な音楽室に黒いピアノだけが不気味に浮かび上がる。

『里咲、何もいな……』

里良が言いかけた時、又ピアノが鳴った。

ポロロロロラ……

千尋がパツとライトをピアノのふちに移すと、

ララリリリリン 「チュー」

ネズミが走っていった。

『なーんだ、ネズミが鍵盤の上を走ってただけじゃん』

千尋は少し残念そうにしていたが里咲はペタン、と膝をつく。

『あうっ、怖かったよお……』

『泣くなあ！ ほら、次行こ』

里良がいうと、里咲は里良にしがみついて3人は音楽室から出て行った。

『後二つだねえ』

『さっき変な女の人が入ってきたねえ』

『大丈夫かねえ……』

『ぐすっ、……次は、なあに？』

里咲は今度こそ心の準備ができるよう、千尋へ聞いた。

『だ〜れも触ってないのに絵が……』

ガタツ 『キャアアア!!』

『……傾くんだった』

『なんでいつつもこのタイミングで起こるかなあ〜、開けるよ』

ガラララ

『暗いよお、あれ、あの絵……?』

里咲は絵を指す。幸いにも目が悪かったために、里咲には傾いている様に見えなかったので、叫ぶ事は無い。

『あっつ、絵が傾いてる!』

里良の指した絵にライトをあてた千尋が言う、かと思うと里良がもう一度言った。

『よし、裏っ側を覗いてみよう』

里良は絵に近づきながら続ける。

『留め具が緩くて外れただけってゆーのは無しだからね』

しかし、裏をのぞいた瞬間、里良の体もカクン、と傾く。

『ど、どしたの?』

千尋が駆け寄りながら聞くと、里良は微妙に「怒」の表情を浮かべながら言った。

『本当に留め具が片っぽ外れただけだった……』

それを聞いた里咲は脱力する。

『はあ』。

（でも、目が悪くて良かった……）

里咲の目が良ければ、今頃大騒ぎになっていただろう。
……里咲だけであるが。

『それでは、最後行きますか！』

千尋がそう言うと、3人は食堂のある寮へと向かった。

『最後は確か食堂だったねえ』

『さつき、ここの食堂では使わない筈の緑茶のにおいがしてたねえ』
『無事に終わると良いけど、ねえ』

石骨像の裏で、黒い瞳の二人がそういう会話をしているとも知らないで……。

キィ……

『えーっと、ここは何だった？』

戸を開けた里良が千尋を振り返っていった。

『使っていない筈の湯のみが、』

「あゝ、今日もお茶が美味しいですねえ……」
『……きれいに………』

千尋の口が開いたまま止まる。

少しの沈黙の後、三人は大声で叫んだ。

『うわああああ！』『キヤアアアア！』『……はうー！』

約一名遅い気がしなくてもないが、それは気にしない。
ガタッ

食堂の椅子が一つ動いた。

人影が三人の方へと歩いてくる。

「あらゝ。

そこのお二人さん、黒魔女さんになりませんか？
今なら私もついてきます！」

すぐ近くまで来たのは若い女性だった。

その女性は里良と里咲をじっと見つめながらそう言った。

（あまり）危ない人物ではなさそうだと考えた里良は言う。

「黒魔女？！……ていうかあんた、誰？」

その言葉を聞くと、女性は言った。

「えゝとですね……、私は黒魔女の教師さんです！」
インストラクター

「黒魔女の教師？ そんなのいるの？（あと、自分にさんを付けるか？ さんを）」

里良の問いに“黒魔女の教師”さんはムツとして応える。

「黒魔女の教師さんなくして、黒魔女さんはいりえないのです！」

「あ、それもそうか。えゝと、お名前は？ 知らないし怪しいしね、黒教さんこくきょうさん」

「むゝ、何か腑に落ちませんが……まあいいでしょう。」

私の名前は高銅 里依紗です！」

「えっと、里依紗さん？」

私、魔女さんに憧れてたのゝ！」

里依紗のエツヘンとした態度に、里咲はキラキラとした視線を向けた。

「え？！ 里咲ちゃんと考えていつてる？ それ」

すっかり里依紗に夢中の里咲に里良が問いかけた。

「うん、考えてるのゝ。」

魔女になって世界征ふ……じゃなくて、お空を飛ぶのゝ！」

里咲は一瞬黒い発言をしたが、幸いその場に居た人物には分からなかったようだ。

「あゝ、それは楽しそーかも。」

うん、あたしもやる！」

里良がそう言うと、里依紗は微笑んでいった。

「では、決まりですね」

すると里依紗はおもむろにペンを取り出す。

「その証として、印を描かせてもらいますよ」

里依紗の言葉に、二人はハテナマークを浮かべる。

その様子に気付いたり里依紗は、苦笑いをしながら言う。

「あ、このペンは特殊でして、他の人には見えない契約の印が描けるんですよ」

「そういうのもあるんだ……」

感心した様子の里咲を見ながら、里依紗は二人の制服を捲って手の甲に何やら不思議な模様を描いた。

ちょうど里依紗がそれを描き終えた時、あまりにおかしな人物の登場の為、意識を失っていた千尋が起き上がる。

「うう……！ 誰っ!？」

千尋は里依紗に気付くとそう言った。意外そうな顔を里依紗はする。

「見えるのですか？」

「どうして見えるのですか？」

里依紗は千尋に二つの質問を投げかけた。

千尋はぼかんと口を開ける。それを見ていた里良が千尋の代わりに言った。

「この顔してるって事は見えてるね。見えてるのは靈感が強いから

だと思っよ。

千尋、この人は高銅里依紗……さん。黒魔女の教師さんなんだそう
な」

「へ、えー……。そいー……」

千尋はそう言っつと、フラフラ食堂を出て行く。

「ところで」と、里依紗は気の抜ける様な声で言っつた。

「あなた方の家に……いそろうっ、してもいいですか？」

里依紗はあくまでも笑顔で言っつ。

「ほえ？」

「はいい？ あたし達、寮なんだけど……」

里良がそういっつと、里依紗はにぱーっと言いそっつな笑顔で言っつた。

「だいじょーぶですよ」。

見えないのでバレませんバレません」

里良が言っつている事と里依紗が言っつている事はずれている様な気がしたが、生憎二人とも気付かなかつたようである。

「えー……どーする？ 里咲」

「うん、良いと思っつの一！」

「じゃOKっつてことっで」

その事を聞くと、里依紗は頷いた。

「じゃあ決まりですね」

里依紗と里咲の周りには、やはりノホホ〜ンとした空気が漂っていた……。

『見習い魔女誕生だねえ』
『おめでたいねえ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4790m/>

黒魔女物語（仮）

2011年10月7日10時39分発行